



「精神薄弱医学」

国立コロニーのぞみ園所長 菅

修 監修

脳性まひ、脳卒中、頭部外傷と、近年ますます肢体不自由者のリハビリテーションでとり扱う患者は、中枢神経系疾患が多くなってきている。したがって、精神薄弱を伴うケースを扱うことが、PTOT 上どうしても避けられないというのが一般的現象ではないだろうか。

筆者は、精神薄弱については学生時代の教科書の知識しか持ち合わせず、必要に迫られてあちこち読みあさったり、耳学問によって間に合わせてきた。この方面に関する書物では、心理、教育、福祉的立場からの専門書は非常に多い。しかし医学をベースとして、リハビリテーションの考え方のうえに立ち、治療の具体的方法を叙述した日本語の専門書となると、浅学の筆者の知る限りみあたらなかった。

医学としての精神薄弱は、原因診断がすべてではないかと思われるくらい、特殊な型の精薄についても事細かく写真入りで記述されている。しかし、トータルな人間としての精薄をどう理解し、どう治療し、どう処遇していくべきか——最も我々の立場から知りたいと思うニーズには答えてくれない。教育、心理面からの精薄専門書には、指導方法について細かく書かれている。しかしながら、それぞれの立場で見解を異にし、どの立場も、いわば仮設段階にあるという。門外漢の筆者などには、「精薄観」をおり混ぜた観念的、哲学的見解(?)は、多いに参考になる反面、果たして本当かなと疑わしく思うことが多い。もっとも、CP などと同じく、精薄は中枢疾患であり、それだけにむずかしい対象であり、学説の百花

繚乱もまた真理にいたるプロセスとして必然の過程であるとも納得している。

以上の点からこの本が書かれた趣旨をみると、まことに頼もしい。「この本は従来の本のように、精薄をきたす原因疾患の医学ではない」とし、「精薄という状態像を身体医学と精薄医学の両面から追求したもの」であり、「社会的状況の、精薄に関与する因子や、リハビリテーションを妨げる要因を追求することは社会医学的にみて重要である」とうたい、「医学を基礎として、心理、教育、福祉をもカバーし」「精薄はその障害の複雑さから、各科の医師の協力がぜひ必要である」そこでこの本は、これらの医師に役だつものを目指すとともに、教育、心理、福祉関係者にも高度の医学的知識を提供しようとするものである」とその視点は、高く広い。こうしたこの本の性質上、執筆者は多数におよび、多方面をカバーしている。

内容としては、総論、各論、研究の展望、社会的問題と4つに大きく分かれている。総論では、歴史的展望、概念と分類、病因、精神薄弱の発生頻度、症状、関連障害、検査法、診断、予防、治療と10 項から成っている。中では、概念と分類が、精薄というものの多様さ、複雑さがあらわれ興味深かった。従来、精薄の処遇はほとんど、福祉または教育関係者によってなされてきたためか、知能程度だけによる分類が一般に知られてきた。「医学では、病的機転を度外視して、単に知能程度だけでは精薄としない」と強調している。今日まで実に多くの分類法が行なわれてきているが、中で、菅修氏私案では、「リハビリテーション

に従事する者にとって使いやすいこと」「この分類は、医学的、臨床的分類であって、他の分類を妨げたり、否定したりするものではない」という立場をとり、筆者には大きく共感できるものである。教育、福祉、それぞれの立場からの必要性で行なわれる分類は、有用である限り、否定されるものではないと筆者も思う。

「治療」の項では、「精神医学的治療」を担当した著者の、「精薄に対する治療」を確立しようとする姿勢が同感できる。指導教育の場においても、生活指導、作業訓練など、外見上類似の活動が行なわれ、ことばも生活療法や作業療法とまぎらわしい。同じことをやっていて、教育、心理の場では「指導、訓練」であり、医学では「治療」とこれと呼ぶ。どういうわけであろうか。著者は「教育、指導」と「治療」はちがうのだと述べ、治療とは治療意識を治療者が十分に持つことだとしている。問題行動や情緒のゆがみは、教育の場でも改善されるが、それはあくまで教育活動の二次的産物であるのに対し、治療では、これこそ直接目標であると述べている。

各論は原因別に精薄像を解説し、研究と展望は、専門家には面白いと思う。社会的問題は、医学を中心とした総合精薄書の色彩の強いこの書の最終コーナーとして登場する。特殊教育、福祉、非行、犯罪を扱い、オリエンテーションの役目を果たしている。

(B5判、654 ページ、12,000 円、医学書院)

(東京都心身障害者福祉センター、
作業療法士 寺山 久美子)